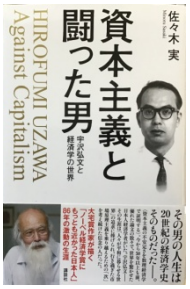
資本主義と闘った男



写真は宇沢弘文先生の「評伝」である。宇沢先生と経済学の足跡をたどることができる大著である。多くの書評が出ているが、まず東京新聞6月30日朝刊に掲載された経済学者・中村達也さんの書評から。

戦後の日本を代表する世界的な経済学者、ノーベル経済学賞に最も近かった日本人、白いあごひげをなびかせジョギングで大学に通う奇人などと語られてきた宇沢弘文（1928～2014年）の、初めての包括的な評伝である。600頁を超える大冊ながら一気に読み進むことができるのは、宇沢本人の魅力のゆえ、そして著者の広範で周到な取材にもとづく人物分析と表現力のゆえである。宇沢本人だけでなく、彼と関わりのある国内外の仲間達への精力的な取材がその基礎にある。

宇沢は、もともとは経済学者としてではなく、数学研究者としてスタートした。偶然にも、K・J・アローへの批判論文を、当のアローに送ったところ、その内容が評価され、スタンフォード大学に招聘される。当時の経済学界をリードし、後にノーベル経済学賞を受賞したあのアローである。そして宇沢は、次々に優れた論文を発表し、主流派経済学の世界で一躍、その名前が知られる存在となる。しかし同時に、宇沢は、次第に主流派経済学の限界を意識するようになる。スタンフォード大学から移籍したシカゴ大学には、市場原理主義を提唱するフリードマンがいて、宇沢とは真っ向から対立する。さらには、ベトナム戦争反対の学生運動と関わって大学当局と衝突し、ついにシカゴ大学を去り東京大学に移る。1968年、大学紛争さなかの時である。

日本に戻った宇沢は、主流派経済学への批判的立場を鮮明にすると同時に、現実の社会問題への関心を深めてゆく。それを象徴するのが『自動車の社会的費用』であった。さらに、公害・環境問題、医療、都市問題へと踏み込むだけでなく、成田空港問題にも深くコミットする。そうした社会問題を解明するための経済学的枠組みとして考え出されたのが「社会的共通資本」である。そして86歳の生涯の最後に意図していた原稿が、東日本大震災についてであったという。宇沢の個人史を語りながら、期せずして、戦後経済学の推移をも語っている一冊である。

大阪日日新聞7月4日に掲載された著者の佐々木実さんの言葉も紹介したい。

竹中平蔵元総務相の裏面に迫った大宅壮一ノンフィクション賞受賞作「市場と権力」の執筆で、宇沢さんを取材したのが契機だ。「経済学の知識体系と、それを相対化する視点とを、自由に出入りする感じが謎めいていて」引きつけられた。「経済学の在り方を痛烈に批判しながらも、最後まで経済学を武器に闘った」と佐々木さん。社会のあらゆる領域を覆い尽くそうとする市場システムを、いかに「人間」のための制度にしていくのか。「生涯を懸けて挑んだ問いを、私たちも考え続けなければならないと思います」

（2019年7月15日）